

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

### 巧みな彼女の性事情　〈M男のニオイは蜜の味〉

一章 快樂に悶える夜 2 式 フロン

二章 マッサージ 31

三章 プールでの羞恥 59

四章 アナル責め 94

五章 甘いおしおき 116

### 一章 快樂に悶える夜

日が落ちた夕暮れ時、蒸した暑さの残る夜道を山野大輔はうんざりしながら歩いていた。

季節は初夏、これから始まる本格的な都会の夏を考えると歩調が鈍るのは仕方がないといえる。

ただ、社会で働く会社員の大輔にとって、それは、ひとつの要因でしかなく労働での疲労が足取りの重さの一番の原因といえた。

歩きなれた自宅への帰路を首元のネクタイを緩めながら歩いていると、大輔の携帯が小さく震えた。

なんとなしに画面をみた大輔は、軽く足を止めた。

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

(今日、お邪魔してます)

簡潔かつ決定されたその短文に大輔は言いようのない、不安の混じった興奮を感じた。

今の今まで、感じていた全身の疲労はいつの間にか消え、かわりに下腹を中心とした熱が身体に沸き、大輔の歩くスピードを無意識に上げていった。

職場から、電車を乗り継いで歩いて数分の場所に大輔のアパートはある。そのアパートの二階、自宅のドアの前で大輔は気持ち落ち着かせるように深呼吸をした。

「おかえりなさい、お邪魔してるね」  
ドアを開け玄関口に立つと、見慣れた部屋の奥から、落ち着いた声が響いた。

「う、うん、ただいま・・・」  
言いながら大輔は、部屋の中へと進む。

「当日に来るなんて、めずらしいね」

部屋に入ると、背を向けベランダに干してあった衣類を取り込んでいた女性に声をかけた。

「そう？迷惑だった？」

干された洗濯物を手に振り返った女性は軽く笑うと大輔を見た。

二十代前半の大輔より、少し年上の女性、沢見美穂。

冷たげな印象に気品を感じさせる顔立ちをした大輔の彼女だ。

その立ち姿は成熟した大人の色香を漂わせ、歩いているだけでも軽く異性の目を惹きつける容姿をしていた。

「そんなわけがないじゃん」

「ふふっ」

軽くすねるような大輔の言葉に美穂は微笑みで返した。

「いつも、前日には連絡、くれるから・・・」

言いながら大輔はカバンを床に置き、ネクタイをはずしてソファアに腰掛ける。

付き合い始めて二年近くたつ二人だが、美穂が大輔の一人住まいに来るようになったのは最近のことだった。

一度彼女を自室にあげた大輔だが、その日の内に美穂の手練手管てれんてくだで合鍵を譲渡することになってしまった。

ただ、毎回訪れる際は、必ず前日には連絡をしてくれていた。

「見られて困るものもあるの？」

取り込んだ衣服のしわを伸ばしながら、美穂は問うように大輔を見る。

滑らかに衣服をたたみ折り重ねていく美穂の白くスラリとした手つきを見

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

やり大輔は答える。

「ないよ、知ってるでしょ」

成人男性なら誰でも所有していてもおかしくないエッチな本や端末内のデータは、ことこの二人の間では事情が違う。

付き合ってきた期間において、それら大輔の聖域は看破され、彼女にすべて没収されることになった。

「知ってる」

そう言っただけ目を細め、顔をチラリと眺めた美穂の妖艶さに大輔の背筋が微かに泡だった。

だがそれも一瞬で、美穂はたまたみ終えた衣類を持つとクローゼットへと歩いていく。

「まあ、そんな警戒しないでよ大輔くん、ちょっとしたお世話」

勝手知ったる我が家のように、テキパキと衣服を箆笥やハンガーに整頓していく美穂。

数回のお泊りや滞在で大輔の自室は、以前とは比べ物にならないくらい片付き、清潔になっていた。

最初は美穂に対して申し訳ない気持ちから、やんわりと家事や掃除を断っていたのだが、好意からという言葉と表情の圧力から断りきれずに、甘えてしまっている現状であった。

それでも、連絡がある前日には必ず自分で部屋の掃除はしていた。

女性が自分の部屋にくるのだから当たり前のことではあるが・・・。

「でも、数日間、空けたらやっぱりちよつと荒れちゃうね」

シンクの汚れが目についたのか、美穂はスポンジで軽く台所を磨きだした。

「ごめん、汚れて・・・」

まさか、今日美穂が来ると思わず数日掃除していない自室の状態に、大輔は若干の気まずさを感じた。

「あつ、気にしないで好きでやってるだけだから」

台所を淡々と磨きながら美穂は、軽く答える。そんな美穂を大輔は複雑な表情でソファから見つめた。

こうなると気が済むまで終わらない、何をするにしても、自身の納得するまでやめない性質が美穂にはあった。

「今日、泊まっていくね」

台所からの彼女の声に、ソファから立ち上がり、私服へと着替えていた大輔は、一瞬手を止めた。

「あつ、うんわかった」

何気ない動作を装いながら声が上がらないように気をつけながら返事をする。

「じゃあ、ご飯用意するから、ちよつとくつろいでよ」

そんな大輔に気がついていているのかいないのか美穂は洗物を終えてタオルで

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

手を拭きながら大輔を見やる。

「あれから食料品、何か買った？」

冷蔵庫に手をかけひらく美穂に大輔があわてて答える。

「あー惣菜しか食べてないから・・・」

「空だね」

空っぽの冷蔵庫の前に、どこかあきれたように美穂はヒップに手をおいた。以前、彼の部屋へ泊まりに来たとき、美穂は、すぐに食べられる、加工食品やつくりおきの料理をある程度冷蔵庫に入れておいていた。

「なにか・・・買いに行くよ」

背後から恐る恐る近づく大輔。

そんな大輔の耳を軽く引つ張ると美穂は笑って答えた。

「いいよ、私を買ってくるから、大人しくし待ってて」

「うっ、わかった」

あまり甘えたくない大輔だが、この笑顔とボディタッチは彼女の反論を許させないシグナルだ。

「ん、よろしい」

そんな、大輔の耳たぶを軽くモミモミといじると、艶のある自身の黒髪をかきあげた。

「じゃあ、行ってくるね」

そういうと買いいものに出かける準備のため美穂は、調味料や生活品の確認をしていった。

◇

初めて出来た彼女が年上でした。

こんなことを知り合いに話すとやっぱりと、笑って納得してくれる。

学生時代から奥手で大人しい、山野大輔とはそんな人間だった。

家族からおまえは、相手から引つ張って行ってくれる、姉さん女房とか結婚できないだろうと散々言われてきた。

今の彼女との日常はまさに、その指摘どおりになっていた。

自分に彼女がいることが、今でも信じられないそんな気持ちをたびたび感じることもある。それくらい美穂との出会いは幸運と思わずにはいられないかった。

そしてこの生活は、今までの人生で最も満ちたりとものであり、不満などあるうはずがなかった。

——ある一点を除いては。

自宅の湯船に顔を半分ほどつかり大輔は、

ドクドクと高鳴っている自身の心音が聞こえてくる錯覚を覚えていた。

好物である揚げ物を夕食として作ってくれた美穂と食事をとり、たあいのない会話で食後は、まったりと過ごした。

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

翌日は休日のため、軽くお酒の入った二人は、美穂のからかいの入ったイチャつきで戯れあつた後、泊まりの時のいつもの流れで

大輔は先に浴室へとすすめられた。

何度も経験しているが、このドキドキはいつまでたつてもなれることはない。

経験といえるのかどうか、彼女美穂との蜜事は、幾度繰り返しても、性の手ほどきから先に進むことはなかった。

二人の性経験の格差は、それだけ離れており、大輔は男としての矜持を一度も示せずにいた。

そんなただれ、甘やかされた関係性の中で、大輔は微かではあるが不満を覚えていた。

一度でもいいから美穂のよがり、喜ぶ姿がみたい、そんな小さな決意を胸に大輔は湯船を上がる。

何度も何度もその決意を軽く甘く溶かされてきたことを、大輔は今日もまた忘れていた。

「お先・・・あがつたよ」

浴室を出て、更衣室で軽く身体を拭きながら大輔は、自分でも白々しいと思える言葉を発した。

「はいおつかれ、背中、ふくね背後から低く、平淡な声が聞こえ背中にそつと柔らかな布地が押し当てられた。

「ありがとう・・・」

後方の彼女にお礼をいい振り返ろうとすると、バスタオルを手に美穂は首を固定しつつ頭をぬぐってきた。

「動かない」

凛とした響きを持つ言葉に、しかし大輔は反論する。

「いや、子供じゃないんだから・・・」

「ふーん？」

言い訳のような大輔の言葉に、美穂は軽く流すように大輔の頭から耳へ布地を滑らせる。

指先にタオルをとがらせ、両耳の内側をこすり、穴をグリグリとふく。丁寧に耳の後ろをこすられると、ゾクゾクとした感情がこみ上げた。

気がつけば、大輔は背後から密着された状態で耳を拭かれていた。バスタオル一枚は隔ててはいるが、柔らかな女性の肉体と独特の息づかい、匂いに全身が反応する。

無言のまま美穂は、耳を拭いた後、再度背中を念入りに拭いた。

「はい、両手をあげて」

「いや、あの」

「ばんざい」

タオルで脇を一度ぐりつとくすぐられた後、吐息と共にハスキーな声が耳

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

元で囁かれる。

その声に無意識に応えるように、大輔の両手がゆっくりと持ち上がる。

「うん、いい子」

そう言っただけでゆっくりと二の腕を拭いていく美穂に、大輔は顔を横に向けた。「だから・・・」

「そんな、子ども扱いは嫌なの？はい、わしゃわしゃ」

反論をしようとした大輔が言葉を返す前に、美穂がそのまま脇の窪みにタオルの上から指先をうごめかした。

「ちよっちよっ、んっ、はっつ、やめて！やめて！」

くすぐったさに身をよじらせる大輔。

「こら、子供じゃないなら、あばれない」

言葉とは裏腹に美穂の脇を責める指はさらに激しさを増す。

「やめっ、くすぐったいって、あっちよ」

人体の弱点であるくすぐりに大輔はついに我慢できなくなり、背後の美穂を引きはがし離れようと考えた、が

「おとなしくしなさい」

再び耳元の呟きと同時に、脇に鈍痛が走る。

両手を大輔の脇に押しつけた美穂は皮膚を強めにつねる、そのまま背後に引っ張るようにして耳元に口を近づけた。

「まだ、体が、ふけていないでしょ」

諫めるような言葉に大輔はゆっくりとうなずくしかなかった。

「ちゃんと拭かないと風邪になるから」

あきらかに口実とわかる言葉に、しかし大輔は反論する気力は削がれていた。

美穂は両脇から手をゆっくり緩めると、再びバスタオルを持ち背中、腰をぬぐっていく。

ゆっくりと下半身に移動するバスタオルに大輔は、息をとめて無意識に期待を膨らませていた。

臀部にタオルが到達すると軽く、ひとなですると、スルリと布地がはがされる。

閉じた、大輔の内腿にへびのように細長い何かが潜り込んできた。

「あけて」

耳元で今までとは違う、心臓をつかむような低い囁きが響いた。

内腿の筋肉を細い爪先が一本、ツーツーとなでさすった。

異様に冷たく感じる一本の爪先は左足の内太ももをなぞった後、股の根元へ戻ってきた。

今度はもう一匹のへびが右足の内側へ、そうようにはった。

真っ白い美穂の薬指と人差し指が股を開かせるように両腿をなでおろすと、大輔の足はゆるゆると開き陥落していった。

「ふふっ」

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

嘲笑の響きが混じった冷たい声、たった二本に指に屈した両足は、いままで快感の味を覚えこまされたあかしといえた。

じんわりと汗ばむ浴室で、二人の息遣いが鳴り響く。

男の息遣いは荒く不規則に、女の息遣いは、音を奏でるように涼しげだった。

美穂は落ちたタオルを拾い上げ、きもち大きく広がる足の片方に巻きつけた。かがんだ体勢からゆっくり布を滑らせてゆく。

もう片方も同じように這わせて、特に股の根元は震わせるよう念入りにふき取った。

「つつあ」

息を荒げていた大輔が微かに音を発する。

拭き終わった股の間、垂れ下がった二つのものがゆるりと何かに触れたからだった。

「これ」

後方の彼女の声と同時に、自分の股の間から

白い手が生えていた。

手のひらは何も触れずに細い手首に、両玉が乗っている、それがブルリと震わされると前方の屹立きりりがびくびくと動いた。

「なに？」

問いと連動するようにたぶん、たふんと手首を揺らめかせる。

「大輔くん？」

その波は股間の奥に鈍い衝撃と共にジワリジワリと下半身に蓄積して、衝動を煽る

「——っっ」

美穂の意地の悪い言葉の響きに大輔は思わず、はずかしい言葉を発してしまいそうになったが、かろうじて息を飲み込んだ。

じつくり、ゆつたりと上り詰めさせる性感が、ギリギリで残る理性が大輔を踏みとどまらせた。

「み、美穂さん、たまには普通にやらない？」

先ほどの風呂場での決意、自分の男をみせつける機会をなんとしてもつかみたい。

そんな決意の言葉を聞いた美穂は、意外にも股間から手をあっさり抜き去った。

「普通？」

「はいっ」

わかってくれたのかと正面を向こうとした大輔に、しかし美穂は背後から身体を再び押し付けてきた。

「普通の人は身体を拭いてるだけで、こうはならないの」

そう囁くと美穂はしなだれかかり、左手を今度は前から垂れ下がった袋

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

を握り、右手はあごをつかんで耳を唇に近づけさせた。

「どうしてこうなるの？、ふーっ」

囁きと吐息が鼓膜を震わせ、大輔の背筋が反応するように伸びた。

その指摘は、大輔は見なくても自分の股間が持ち上がって行く感覚で理解できていた。

玉袋は白い指の間で、するりするりと泳がされて、下半身の熱と共に浮遊する。

「くちゅ、レロオオオオオ」

あつい吐息と同時に湿った感覚が大輔の頬を這った。

美穂の唇が一度耳を食すと、そのままほっぺたをなめしやぶる、彼女のあごにそえられた右手がゆっくりと、横を向かせた。

「チュポッ」

お互いの唇が近づいてくると美穂は、一度口を離した。

「どうして？」

お互いの唇が触れるか触れないのギリギリで、聞き取ることの出来ないほどの微量な声。

合わさった唇の動きで意味を理解した大輔は言葉の終わりに口をシンクロさせるように軽く開いてしまった。

あつい吐息の誘惑に勝てず口をあけた大輔の舌は、一瞬で絡みとられてしまった。

「んっんん、ふうんぐううっ」

ぬるりと捕らえられた舌に目を瞬かせた大輔の視界に、映ったのは、ほっそりとさげすむように細められた切れ長の目だった。

「んんっ」

大輔の舌をかき回しうわあごや奥歯の近くを舌先でピンツピンツと器用に弾きまわす。

翻弄されクタツた舌を甘がみして、驚いて引つ込みそうな舌をやさしくなめ癒す。

口内では激しい動きに大輔の脳が茹で上がりそうになる、しかし見つめてくる美穂のまなざしは、瞬きもせず冷静そのものだった。

ぐちゅりぐちゅりとお互いの唾液が絡み合い淫靡な音をかなでる。

狭い室内で男の身体には背後から白い肢体がなまめかしく絡みついている。それはまさしく捕食する白いヘビと獲物のようであった。

大輔は翻弄された口内の動きに順応しようと必死になっている内に、息苦しさを覚えてきた。思い出したかのように鼻で呼吸をしようとした時、淡い下半身のうずきが突如消えて、鈍痛を感じて息がかかるくとまってしまった。痛み、というよりも、鈍い衝撃というほうが正しい。その原因に若干涙目

になりながら大輔は下を見た。

白い美穂の手がふぐりを強めに握りこんでいた。指先から皺があふれるような握りに、目を見張る。



## 巧みな彼女の性事情～体験版～

心臓が握られるような感覚に耐えていると、ゆっくりと美穂の左手は花が開くように緩んできた。その動作を見て衝撃で浅い呼吸しか出来なかった大輔は、鼻で呼吸をしようとした。

再び下半身を襲う、心地よさすら感じる鈍痛、今度はじんわりと袋が引つ張られながら白い手が緩んで行く。

美穂は鋭いまなざしで、大輔の呼吸寸前に動く鼻筋のヒクつく癖を見抜いていた。

呼吸に合わせたタイミングで下半身をいじめる。二度三度と繰り返すと、大輔の口内は弛緩して、よだれがこぼれ目は焦点を失ってきてしまった。

「んんあっっぽっ」

呼吸の限界で、顔が赤く染まってきた大輔の口から美穂はようやく口付けを解いた。

「はっあ、はあっ」

肩でいきを切らすかのように、口をいっぱい開いて、大輔は肺に空気を送り込む。

しばらく呼吸を整えていると、呼気にあわせてゆったりと下半身のふぐりがゆらゆらと心地よく美穂の白い手のひらで揺らされる。先ほどの鈍痛とはまるで違う、ところかすような愛撫に、大輔は足に力が抜けそうになり、両足を意識的に踏ん張らざるをえなかった。

呼吸が正常にもどった大輔は、背後から絡みつく美穂と目を合わせた。

冷たく細められた目、しかし口元は弧を描くようかすかに形作る。それだけで心臓がわし掴みにされるような妖艶な表情で美穂は笑った。

「濡れてる」

その口元から湿った吐息がもれた。

「ここ」

言葉と同時に、大輔のいきり立つこわばりの裏側に細い指先がゆるりと這って行く。

じりじりとじられるように白い指がそれ単体で生きているかのように、頂上に向かってすべる

丁度剥けた皮の根元、かさのくぼみで指先が角度を変えた。

「んんっ」

ピンクのマニキュアが淡くなる、美穂の爪先が敏感なかさのくぼみをカリツとひっかいた。

大輔の口から声もれる。

そのまま爪先はかさの先たん、頂上のくぼみでとまり指の腹がその鈴口をやさしくこねた。

とろりと白い指先をぬらす粘液をたっぷりとこすりつけ、先たんから糸を引かせるように指をこわばりから離す。

指から大量の液体がこぼれ、アーチを描いた液体はトロっと足元にこぼれた。

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

真っ赤になった亀頭の先に再びぷつくりと雫ができる。それを容赦もなく指の腹でつぶすと美穂は指先に巻きつける。再び、指を持ち上げとろりと地面にたらず。

その動作を、二度三度と繰り返すと、誘われるように、大輔の透明の先走り汁はただらだと尋常と思えないほどこぼれていった。最後に先たんから指先をなした美穂は、手を大輔の脇下からくぐらせて顔の前にやり、人差し指と親指で先走り汁をニチャリニチャリと見せ付けるようにしてこねた。

「ぬるぬるしてる、・・・おもしろし」

低音な囁きは、事実を指摘し責めるようなニュアンスで大輔の耳に響いた。

まるで粗相をした子供のような羞恥を感じた大輔の顔はみるみると朱を帯びていった。

そんな大輔の横顔をじっと見つめると美穂はゆつくりと身体を離す。

久しぶりに肉体から熱と重さがなくなった大輔は、どこか未練がましく美穂を見つめる。しかし

「これはおしおきかな」

冷たく言い放った美穂の言葉で大輔は顔をこわばらせた。

「あっうっ」

口から言葉が出掛かった大輔だが、反論は許さないとばかりに白い足が股の間に入り込んだ。

ズンと陰囊を押し付けられ、つるつるとした太ももに押し上げられると言葉がでなくなってしまう。

「足が濡れる」

股の間に差し入れた美穂のショートパンツから出た、太ももは肉棒から流れつつ先走り汁で皺袋と共にびしょびしょに濡れていた。

「あっんあ」

そのままニユルニユルと張りのある太ももの上でこねあげられたふた玉の気持ちよさに声がでる。

「ちゅっ」

その声を聞いて美穂は再び、大輔の首筋に唇を押し当てた。

ちゅば、ちゅばと軽いバードキスを浴びせた後、

「んっ」

唇を大輔の口元に近づける、その行為に無条件反射のように口を開き応える。

再びお互いの口元がとけあうような、濃厚なキスが再開された。

大輔はさっきの受身のキスとは違う、こちらから積極的に舌をからめてなんとか奮闘しようと動かそうとした。

しかし、美穂の舌を捕らえようとすると、下半身のふぐりが小刻みに揺さぶられ気持ちよさに舌がとまる。

その間隙をぬって舌は、美穂の唇に挟まれゆるゆるとしごかれていく。

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

先ほどの二の舞になることを恐れた大輔は、舌を引き抜こうとし美穂の目を伺った。

ゆっくりと糸のように細められた美穂の冷徹な目つきに大輔は背筋を振るわせる。

それでもなんとか自力で舌を引つ込めようとしたとき、

「んっんあ」

ズンツと股間が一瞬だけ、持ち上がったような衝動を感じた。ズンツズンと立て続けに、股間の奥の精巣せいそうに直撃するような衝撃に大輔の力が抜ける。

白く細い美穂の脚部は膝で弄ぶように何度も、袋と菊門きくもんの間の会陰部えいんぶを背からの確に突き上げる。

突き上げは、何度も行われ大輔の下半身は緊張と弛緩を繰り返させられていた。

大輔の口内は降参するかのように、大きく開かれ舌がゆるりとつきだされる、美穂はそれを当然のごとく唇で挟むと軽くあまがみをした。

股を突かれるたんびに、ピタンピタンと更衣室に音が響く。

立ち上がった大輔のペニスが上下にゆれ、お腹に打ち据えられる音だった。

その先つぼからは、おびただしく透明な汁があふれていた。

「んんっ」

そのだらしない光景に大輔は、羞恥を覚えたが、自身の胸元に、添われそうになっていた白い両手に気がついた。

股へのトントンと舌への愛撫、これは軽く大輔へ“わからせる”美穂の巧みな性技だ。

しかし、そこから胸、乳首への責めまでやられると話はかわってくる。

過去の経験から大輔の本能が警鐘を鳴らし始めた。

まだ始まったばかりとはいえ、今日の美穂はいままでので行為に比べて比較的大人しい、いつものような脳ゆだが茹るような圧倒的な快楽をあたえられてないし

ねちねちとした心の奥まで丸裸にされるような言葉での責め苦も味わっていない。

背後から組しきられるようにして、口内では舌があまく嘔まれ、下半身は細い足一本で会陰えいんを突かれてジンジンとした疼きを与えられる、そして白い両手がさわさわと、男の乳輪付近をなでさすりだした。

ゆっくりと焦らすように、爪が乳輪をなぞり上げる、それだけで大輔は全身が総毛だつちを感じた。

彼女の髪が頬に触れ、サラリと流れ落ち、

大輔の意識は顔に向いた、観察するような冷徹な目が細められ、ゆっくりと瞳が下を向く。

無言で視線を胸部へと誘導されると、美穂の指が乳輪をなぞるのをとめた。

細い指先が、見せ付けるようにして親指と人差し指で挟むようなジェスチャーを見せた。

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

何も触っていない乳首がジーンツとうずき、股間の先に、透明な液が吹き出る。

脳が一瞬、勘違いを起こしたかのように、フラッシュバックを起こした。過去に乳首だけで何度もオーガズムを美穂にあたえられた蜜事が頭によぎる。

股をトントンとされ続け、精巣から白いなにかが上ってくるのを感じた大輔は覚悟をするように目を閉じた。

このまま乳首をひねり上げられたら、ひとたまりもない、ペニスへの刺激もないまま、恥ずかしく射精してしまう、同時に脳内で快感が爆発して想像以上の痴態をみせてしまうかもしれない。

そう覚悟した大輔だが目を閉じてても、絶頂前の緩やかな快感だけがいつまでも続く。

「んっ」

そんな大輔は目を閉じたまま、舌を引つ張られるのを感じた。

舌だけじゃなく、股突き、そして乳輪のなぞりが大輔の全身を回転させるように誘導している。

背後から組み付かれたまま地点はほぼ動かずに方向を変えるように促される。

快樂の持続にひっぱられるように身体の向きを変えた大輔は、しばらくその場で責めを受け続けた。

大輔は浅い思考の中、身体の向きを変えられたことに疑問を覚えゆっくりと薄目を開いていった。

「…」

目を開いた大輔は、鏡面上にいる男に目を見開いた、白い肢体したいに後ろから押し掛かれ、汗だらけで、全身を震わせている。

細い足に踊らされるよう腰を突き上げ、真っ赤に勃起したこわばりは、先から汗を飛び散らせている。

美穂は、その痴態を煽るため、目をつぶった大輔に洗面所の鏡面ガラスの正面へ誘導していた。

キスをしながら横目で鏡を見ていた大輔は反射的に目をそらそうとしたとき、ちゅぽんと口から美穂の舌が引き抜かれた。

同時に白い手が無理やり正面を向かせるようにあごをつかんだ。

耳元に唇が近づく。

「なにこれ？」

深みのある低い声が鼓膜を震わせた。

「つつっ、」

痴態をさらしている恥ずかしい男が自分だという認識をした瞬間、大輔の全身はまるで湯気がでるかど錯覚するほど目に見えて赤みを帯び始めた。

しかし絡まれた白い美穂の肉体は、まるで変色をせず赤びていく大輔の肉

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

体に映えるようにうごめいていた。

ゆで上がった頭で大輔は鏡面上の強調された白と赤のみだらな姿をみやる。大輔が美穂の顔を見ると、白い肌に黒髪がきれいに貼りついた、その顔はいつものように、冷徹な目つきで目を合わせてきた。

ルージュが引かれた妖艶な口元が微かに笑った。

「あっ」

それを合図にひととき強くトントンと股へ突きを受けた大輔は、胸部に這われた指先が挟むようにして乳首の前に添えられるのをみた。

ぴゅるつとこわばりの先から透明な液体が飛び出る。

(いくー!)

脳内をはじける全身のオーガズムに備えた大輔は身体をふるふると振るわせた。

しかし予想した衝撃はいつまでもたつても訪れなかった。

そればかりか、自身の身体から重みと熱が奪われていることに気がついた。

「え？」

我に返るように、鏡面をみると、自分の斜め後方で、口元を上品に手で押さえている、美穂の姿があった。

お互いの肉体は、はなれているにもかかわらず。大輔の屹立したそれは、惜しむようにびくんびくんと上下に揺れていた。

「な、なんで？」

待ち望んでいた圧倒的快楽を、とりあげられた大輔は、焦がすようなじつれったさに、おもわず声が上ずった。

「ん？」

大輔の焦りに対して美穂の反応は、鈍かった。まるでなにがあったのか、気がついていないように、涼しげな顔で大輔を見つめる。

思い通りに、大輔を弄んでおいて何のことかと、しらばくされる。

性質の悪いその態度に、しかし大輔は表立って憤ることはできなかった。

もともと、自分の望んだ快楽ではなく、抗えずに委ねてしまった快楽である。それにあの先を望むということは、心の奥まで、被虐の喜びを認めることになってしまう。

二十代前半の大人の男として、大輔はどこかで自分がマゾだということから、逃げ道を残しておきたい気持ちがあった。

自分から進んで、快楽をねだる変態にはならないと、一線を引いていた。

そんな葛藤を見通しているような、澄んだ眼差しが大輔をみつめる。

しばらく、内省していた大輔の股間は、若干のおちつきを取り戻し、徐々に垂れ下がっていた。

美穂は視線を下げその様子を、切れ長の目で追っていた。

「まだ、濡れてるね」

一歩近づいて身を寄せてきた美穂に、大輔はビクリと身をこわばらせた。

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

「髪の毛」

しかし、予想とは違い美穂はその手を大輔の頭、生え際にさらっと触れさせた。

「いや、これは汗かな・・・」

実際、風呂上りの髪の毛は、軽く拭いてもらったので今、濡れているのは、先ほどの行為から出た汗だといえた。

「乾かさね」

二度三度と、大輔の額の髪を梳くように指を撫でつかせると、背後から洗面台に備え付けてあるドライヤーを手を取った。

左手はゆっくり癒すような手つきで、大輔の髪の毛を梳いて、右手で器用にドライヤーのコードに巻かれているバンドを解く。そのままコードをコンセントに差し込むと確かめるように風種を切り替える。

「あ・・・」

「じっとしてて」

戸惑うような、大輔に美穂は手馴れた美容師のような手つきで背後から髪を乾かしにかかる。風熱は適温を保ち、髪にやさしい風をかけていく。左手のなでるような指先と送風に大輔はうっとりとした安心感を覚えていた。しばらく無言で髪を乾かす時間が流れ、時折背後の美穂の女性らしい胸の膨らみや鼻腔をくすぐる甘い香りに、反応することはあったが、特にとがめられることはなく髪はしっかりと乾ききっていった。

ドライヤーのスイッチを切った美穂は最後にゆっくり大輔の前髪を撫で付けた。

「あ、ありがと・・・」

「次はこっち」

大輔がお礼を言い終わる前に、美穂は額にある手をゆっくり身体に這わせながら下半身に下ろしていった。

大輔のヘソの下、陰毛がある場所で手は止まる、クルクルと指先を陰毛に絡ませる。

ドキリとふるえる大輔の耳元で囁かれる艶のある声。

「まだ濡れてる・・・」

指は陰毛を絡ませたまま軽くひっぱりするつとほどいた。

引っ張られた陰毛と一緒に垂れ下がった竿の先からとろりとおつゆがたれてきた。

そのおつゆを、白い指先で掬いあげると、そのまま亀頭の先へぬるぬると撫で広げた。

「ここも、乾かさなきゃ」

ドライヤースイッチをカチリと鳴らす美穂に我にかえたかのように大輔が反応した。

「ちよっと待って、待った」

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

戻ってきた妖しい雰囲気と、淫靡いんぴにうながされた身体に残る熱が、心臓を早打ちさせる。

しかし、ペニスにドライヤーという組み合わせはどう考えても、危険を感じずにはいられない。

アブノーマルへの感覚がここ最近、美穂とのプレイで緩みまくっている大輔でも、これには忌避感をぬぐえなかった。

「さすがにこれは・・・」

そう言っ拒否しようとした大輔に、先ほどと同じ様に美穂は背後からゆつくりと身体をからませた。

「大丈夫」

左手を大輔の顔に当て、右手のドライヤーのスイッチを押す。微音が鳴り抑えられた風量の涼しい風が、大輔の股間のしげみをやさしくなでた。ゆつくりと股間を風がなでる。

「乾かすだけだから」

耳元で熱っぽく囁ささやき、風向を半立ちのこわばりに近づける。

「乾いたら終わりだから・・・」

「それなら・・・」

ハスキーな艶声つよこえと下半身に感じる心地よさに大輔はついつい首を縦にうなずいていた。

背後から、見つめる美穂の唇が妖艶に弧をえがいたことに気づかず。

「じゃあ・・・」

そう呟いた美穂は、左手をゆつくりと半勃ちの竿へと合わせた。右手はドライヤーの微風を股間にあてる。

指を使って鈴口から垂れている糸を引いた粘液をゆつくり竿全体へぬりたくる。

「ぬりひろげたほうが乾きが早いから・・・」

言葉通りに指で、カリ首と言われるかさの窪みから、余った皮の皺しわまで念入りに塗り広げる。

全体に塗り終えると、ドライヤーは根元の陰囊いんのう近くに風を当てた、その際に大輔が気がつかないくらいに風を弱めて、冷風の強度を高めた。

「はああっ」

ひんやりしたふた玉への風に大輔はうっとりとして声をもらす。その反応は、しかし彼女の本命ではない。

美穂は左手の中指と人差し指を立てると、肉棒の裏側、裏スジに根元からピタリとくっつけた、指の腹を小刻みに震わせゆつくりと

先たんに向かってなでていく、カリ首に到達した指先は今度はクルリと向き変え、爪を裏スジに立て、強めにひっかくように撫で下ろす。この一連の往復を繰り返す。

「んっはあ」

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

大輔の半立ち肉棒はみるみると硬く反り返っていき、下半身をぶるぶるとふるわせた。

パン、パンと乾いた音が二度響いた、美穂が大輔の両ももを打ち据えたのだ、さらに前かがみになった上体を起こすように背後から強く密着する。ふるえのとまった大輔の耳元で、冷たい声が指摘するように囁いた。

「また、濡れてる」

右手のドライヤーは再び元の送風にもどり股間へ向けられている。

その股間は美穂の指先で亀頭をつままれ、鈴口からはだらしなくおつゆが裏スジへと流れ落ちていた。

下半身を甘く疼かせる大輔はこれが、故意に仕組まれていることに気がつかない、美穂は陰囊への冷風で、気をそらした後、先走り汁の“出”をよくするため、裏スジを集中して愛撫した、性練磨な彼女はここがほぐれるとおつゆを止めることが出来ないことを熟知していた。

しかし誰が見ても、無表情の彼女からはそんな思考はまったく読み取れない

“しようがない人” 鏡面越しで大輔は美穂の口元がそう呟いたかのように錯覚した。

それほど、彼女の目つきには、嘲笑とあきれが表現されていた。

身体の熱があがり、股間のこわばりは完全に勃起しヒクヒクとふるえる。

その肉棒に再び左手が伸びて、竿に先汁を丁寧に塗りたいとされる。

一度限界まで勃起した肉棒は、萎えることは難しい、そして先ばしりをぬりたくる過程で、美穂は先ほどの、裏スジへの指二本の甘い愛撫を、巧妙にくみこんでいた。

「もらさないで」

甘くところかすような手つきとは裏腹に美穂の声や目つきは、冷ややかで厳しい。

「乾かないでしょ」

呟きながら、ドライヤーの温度を送風から冷風にさりげなく切り替えた。

左手の二本指は亀頭の汁をたっぷりすくうと裏スジにぬるんぬるんと重点的に滑らせる。

すぐさま湿らせた裏スジに、冷風を当てた。

「あっ」

甘美な刺激にペニスははねて、大輔の声がもれる。

濡れた先汁が心地よく冷風を際立たせる。

トロトロとすぐに漏れ出す先汁をすくい今度は、カリ首から二本指で棒の側面をはさみ

皮と一緒に根元におろす、すぐに冷風を当ててまた離す、汁をからませ、もう一度はさむとひきおろす。そして冷風。

二度ほど繰り返すと、ふぐりの二つの玉が上下にヒクついて、とぶっと先からしるがもれでた。



## 巧みな彼女の性事情～体験版～

美穂はそれを見逃さず、目を細めると、指を裏スジに戻し、今度は時間をかけての二本指の愛撫と冷風で可愛がった。

「あああついでい、い」

甘い冷風での責め、大輔は今日一番の本格的な愛撫に声をあげる。

これまで、ジリジリとたまり続けてきた放出欲が、急速に跳ね上がる。

気持ちよさに促され、つぎつぎにあふれ出るお汁は、すぐさま、甘指責めと冷風責めの燃料にされる。

ペニスの愛撫はじゅわと睾丸に広がり脳の意識がすべて股間に集中する。

ヌルヌルとした指の愛撫に身をゆだねていると、急に竿が爪でひっかかれた。

その感触がトリガーとなり、一気になにかがのぼりつめる、ギリギリの状態で歓喜が吐き出される直前、

「つぶ」

全身が何かに握られたように締め付けられた。

「まだ、だめ」

冷たく澄んだ声が、急激に握られた全身の感覚を下半身へと集約させる。

大輔の顔から汗が滴る、ぼやけた視界を下に向けてると、真っ赤なペニスのカリ首に、白い二本の指がわっかを作るようにして締め付けられていた。

美穂の丸めた親指と人差し指は、ぎゅっと締まり、パクパクと息をするように、ひくつく鈴口から、これ以上一滴のおしるも通さないというような強い意志を感じさせた。

「だ、だしたい・・・」

大輔の口から、心からの本音がもれた。

「まだ、乾いてない」

無機質な声と共に、美穂の締め付ける白いリングが真っ赤な淫棒の根元へ尿道の精液を逆流させながら降りて行く。

「まって」

遠ざかる射精感に思わずがるように声がでた。

「だめ」

冷酷に大輔の懇願を一蹴した美穂は、根元で締め付ける指を上下に揺らす。亀頭に残る透明な汗が粘質をのこして飛び散らされる。

顔を染めてそのようなすを見る大輔に、背後から頬をよせるように、美穂は顔を近づけた。

「このままだと、いつまでも乾かないよ？」

先ほどとは違い、どこか甘い響き残した声が耳朶じだをなでる。

先ほどのギャップもあり本能的に甘えなくなる衝動に駆り立てられた大輔は、すがるように美穂を見つめる。

そんな大輔の耳をちゅっと口付け美穂はさらに甘い声で囁く。

「温度をあげてみよっか、ドライヤーの」

囁きと同時に、美穂の左手は、根元を締める親指と人差し指を残した三

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

本の中指、薬指、小指で垂れ下がった玉袋を器用に転がした。

「それで乾かしてみるの」

三本の細い指は、ころころと玉袋をからかうと、その下にある会陰部えいんをゆつくりとおさえ、内側まで響くように細かく振る寄せた。

「ね？」

「んっつ、う、うん」

ジンツと痺れた脳が、甘える感情に従い無意識に返事をさせていた。

「じゃあ」

そう言っただライヤーをペニスに近づける、左手の指は根元から離さない、今、指をほどくとすぐまた射精感が込み上げてしまうと、美穂は締め付ける指の感覚で把握していた。

大輔自身もドクドクと脈打つ股間に、危険水域を脱し切れていないと、感じていた。そしてなぜかはわからないが、その感覚はどこか、なにかにすがりつきたくなる得体のしれない不安感をともなっていた。

そんな不安そうな大輔の顔を、背後から美穂は嗜虐しぎやく的な表情で見つめた。美穂はその大輔が抱く不安を完全に見透かしていた。

それは男が我慢が出来なくなるまえに、する情けない表情。こんなはずではなかったという表情。

美穂は大輔との営みで少しづつ、巧妙に主導権をにぎり、身体からゆっくりに調教を進めていた。その成果の一つが、意図しない快楽の持続だった。当初は大輔は美穂から見ても、もうすこし自分の性欲をコントロールできる男だった。そんな男を美穂は、官能の悦楽えつらくに何度も浸らせて、一度のぼりつめた性感が簡単には身体から引いていかないように脳に癖付けをしたのだ。

以前の大輔なら、根元を押さえられたペニスの状態ならすぐにも射精感はおさまっていたはずだが、今では我慢をするのもままならない。

そしてそのことに自覚すらできていないほど、巧みに美穂によって躡けられていた。

身体の快楽に追いつけない心が、無意識に不安や焦りを呼び起こす。その若い男の情けない葛藤が、美穂の嗜虐しぎやく、心を満たしていた。

二本指で押さえつけられたペニスの根元から湧き上がるジンジンとした切ない興奮と不安に大輔の顔が、切羽詰った表情をみせる。

その大輔の、首筋に白く整った鼻がツツと触れた、首筋から頬へ微かにすんすんと鼻をならし移動する。そして耳の裏側に鼻を押し付けひときわ深く臭いを嗅いだ。

不安定な男が発する独特なフェロモンが美穂の鼻腔をいっぱい満たした。じつとりと臭いを嗅がれた大輔は、よくこの行為をされていたが、いつまでたっても慣れることのない、羞恥を感じた。

満足した美穂はいったん顔を離すと、ペニスに向けたドライヤーのダイヤ

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

ルをカチカチと操作した。ゆっくりとした風が暖かくなって行く。丸裸で弱点をさらす敏感な亀頭はいち早くその変化を察知し鈴口をヒクつかせた。

しかし根元で強く握られた指のおかげで汗が湧き出てくることはない。

陰茎全体をゆっくりと温風が流れる。

温度がさらにあがり、亀頭の濡れた液体が

ゆっくりと乾いて行った。

びしょびしょだったペニスは温風により、

今や濡れているのは鈴口の周りだけになった。

ゆっくりではあるが、確実に少しずつペニスの濡れは乾いてきていた。

もうすぐ終わる、あと少し、大輔はペニスにわずか残る粘液が乾ききり、

このアブノーマルな状況の終わりをじれるように願った。

息をつめてペニスの状況を、見ていた大輔は根元をしめる白い指に目とまいった。

本能が警告を発する、この女がそのまますんなり終わらせてくれるはずがないと。

「美穂さん！」

「ん？」

懇願するような切羽詰った大輔のに美穂は目を向ける。

「下、根元緩めないで」

「下？コレのこと？」

言葉と同時にぎゅゅと股間の根元がしまる。

「ああっそ、そう・・・」

圧迫感に、もだえた大輔だが、指を緩められ、再びせき止められている先走りを流すよりもマシだと考える。

指の輪っかの強弱で、いくらでも股間をコントロールするこの彼女の手のひらから逃れるためなんとか先手を打たないといけない。

「絶対、はなさないでね！」

念を押すように、叫んだ大輔に美穂は妖艶に笑った。

「ええ、離さない、ぜったいに」

ねっとり欲望を感じさせる声だった。

次の瞬間、下からカチカチと不吉な音が聞こえた、同時に亀頭に鋭い痛覚が走った。

「いっつ、あっあああああっ！」

意識が飛びそうになるほどの熱さ。

強烈な熱風が股間の敏感な場所に容赦なく浴びせられていた。

ぶわりと全身から汗がふきだし、大輔は逃れようと身をよじった。

「だめ、はなさないから」

低く響く、ゆるぎない声と共に、ペニスを締め付ける指は寸分も動かない。背後から絡むように、細い白い足が巻きつき、足の甲を踏み固定する。

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

「やっ、やえ、やめっ——」

喉がかすれるほどの苦痛のような感覚、ペニスに間髪をいれずにピンタをされ続けているような熱さ。

「っっ——、んんんっっん、」

涙目になり、涎をふきこぼす大輔の口がふさがれた。

美穂は背後からキスをして、泣き叫ぶ舌を捕らえ、ゆったりとなめさずる。身体を固定され、拷問のような下半身とは裏腹にキスは甘やかすようにやさしかった。

ただそれは、激痛に慣れさないように、甘みで刺激を際立たせる毒のようなやさしさだ。

味わう感毒に、悶えながら大輔はついに限界が近づいてきた。

神経が焼け切れそうになった瞬間、美穂の口がゆっくりと離された。

下半身の灼熱は消え、白い指の締め付けだけが残る。ドライヤーからは涼しい風が股間にそそがれていた。

「はあ、はあ、ひどい・・・」

「やっど乾いた」

息を荒げ、涙目で抗議する大輔を無視するように、美穂は下半身を見つめ呟いた。

「終わり」

いまだにヒリヒリとする残痛に耐えながら大輔は美穂の言葉に、なんともいえない表情をした。

ここで終わりたいくないという、快楽への渴望とこれ以上、倒錯した世界へ踏み込みたくないという理性がせめぎあう。

「いたいの？」

耳元で優しい声が囁く、あわせてゆっくりと根元の締め付けが解かれてゆく。

大輔はコクリとうなずいた。

若干警戒するような大輔に、美穂は安心させるように囁く。

「もう、痛いのは終わり」

美穂は開放されたペニスを指先でなでながら、ドライヤーの温度を今度は冷風に変える。

真っ赤になっている陰茎の裏スジを一番喜ぶ指先の動きで撫でほぐす。

「ごほうび、ほしい？」

低く甘い囁き。

亀頭の先、鈴口からダラダラと尋常じゃないほどの透明な汁が漏れる。

さっそく、白い指先は心得たとばかり裏スジに塗りつけ、冷風を当てた。

ペニスに繰り返し教え込まれた甘い快感は一瞬にして、射精感を脳に送り込んだ。

股間の奥に力を入れ無意識に射精をなんとか耐えた大輔だが、指は止まらない。

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

人差し指でくるくると汁を絡め、鈴口から裏スジに根元までゆっくり液をつけながら撫でる、そこで冷風を股から当てると、覚えた快感にヒクつく。ペニスの動きに合わせて、とがらせた爪を今度は根元から、引っかきながら亀頭へ滑らせた。

尿道から白いマグマがせりあがる。もはや意思では耐えることができない、射精への準備。ようやく、いかせてもらえるという歓喜。

甘い放出に身をゆだねた大輔の耳朶じだがレロリと舐められて低い囁ささやきが響いた。

「ごほうびほしい？こ・こ・こ・で」

カリ首に強い締め付けを感じ、射精が指で再びせき止められていることを認識する。

「口でいきたい？」

寸止めへの不満が一瞬で吹き飛ぶ。

脳がゆだって、期待に鼓動がはねた。

「いきたい！」

無意識に懇願の響きを持つかすれた声で大輔は叫んでいた。

そんな大輔を焦らすように美穂はゆっくりと大輔の正面へと身体をすべらせた。

今日始めて二人は至近距離で向かい合った。

ドクドク早鐘がなる鼓動の大輔に、美穂は鼻をくつつけるほど顔を近づけて、細い指で自分の唇をなぞった。

魔性の化身のような異様な色香に大輔の頭がぐらつく。

この唇に、してもらえる、それを想像した。ペニスは今日一番のふるえを見せていた。

大輔の興奮は普通ではなかった、その理由は美穂の口での愛撫にある。

何度も肌をかさねた中でも、口を使った。ペニスの愛撫は、あまりされたことがなかった。

過去に、ごほうびと称され数回だけしてもらったことがあるだけだ。

しかしその許された数少ない口での愛撫は、大輔の性の価値観をひっくり返すほど甘美で濃厚だった。美穂にはじめて口でのプレイを許された日は、夕方から、翌日の明け方まで、じつくりと時間をかけて、唇、舌、歯、喉など口内すべてを駆使して、ペニスをとろかさされた。

あまりの甘美な体験にその日から数日間は美穂の口を見ただけで、思い出し股間を勃起させてしまうほどだった。

その、とっておきを与えてくれる、今日ここまで焦らされたことが報われる。

美穂の顔が細かい吐息と共に、大輔の身体をなでるように、下りていく。

首筋、胸、おへそ、陰毛、そして、反り返りばたばたと先から汁をたらす

赤い。ペニス。

その亀頭の寸前に赤い唇が止まった。

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

ビクビクと震える。ペニスに鋭い視線向ける美穂はしかし、静止して動かない。

しばらくそのままの状態が続き、大輔は興奮で我慢ができなくなり、はしたなく唇に向かい股間を押し付けた。

期待したペニスへのやわらかい感触は、しかしまったく感じられなかった。美穂の唇は腰が動いた距離そのままに亀頭の近くで止まっていた。

美穂の鼻息と吐息がじれったく、淫棒いんぼうをなでる。

大輔が腰を戻すとその距離分、唇がついてくる、偶然を装い、ペニスを動かしてもその動きにピッタリとついてくる。なんども不規則に動くペニスに添う唇に、もはや、美穂の唇の動きにペニスが操作されているようですらあった。

あまりに強い口内への欲求について、へこへここと、無様な腰つきを大輔はみせた。

その動きそのまま美穂は唇の追走を繰り返し、しかし、一ミリたりともペニスに接触を許すことはなかった。

「はっ、はっ、おねがい・・・なめてっ」

焦れに焦れた、大輔の口からついにおねだりの言葉がもれた。

その言葉を聞いた、美穂の唇の端がゆっくりと弧を描いた。

薄くあいた唇の間から赤い舌がのぞいた。

期待にふるえる大輔のこわばりの先っぽに、ピトリと美穂の人差し指がくつついた。

指先が鈴口を細かくふるわせると、トロつと滲みでた粘液をからませる。

細かくふるわせた人差し指を裏スジに這はわせて根元へと撫で下ろした。

指が根元と睾丸の間でとまり、軽くゆさぶられ、押し込まれた。

指先に押された根元の動きに、亀頭がゆっくりと前方に突き出される。

その赤く濡れた亀頭の前に、軽く開いた美穂の唇が迫ってきた。

ねちやりと音を立て、美穂の唇が細い唾液の糸をひき、ゆっくりとひらかれ――。

「だ・め」

低い甘い音が大輔の耳に届いた。

美穂の唇がすぼめられ、亀頭から一気に根元に向かって、息を吹きかけた。

「ふーっ」

甘い冷気がペニスをなでた。

股間に何度も覚えこまれた快樂に陰囊いんのうが大きく収縮し、尿道からぐつぐつと精液がのぼっていく。

美穂の唇は口角を持ち上げ、動こうとせず、その目は面白がるように細められていた。

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

その表情から美穂はこのまま、愛撫をしてくれないと、大輔は悟った。我慢しても、流れがとまらないことに焦った大輔が股間に手を伸ばそうとしたが、冷たく白い手からみとられた。

「あっああっ」

なんとか流れを止めようと尻に力を何度もこめるが、流れは止まりそうになかった。

大輔はせめて最後に、しごいてほしいと哀願をこめた目つきで美穂を見つめた。

「ふふっ、口でもらして・・・」

ぶるぶる震える竿に、低音と共に吐息がかかる。

最後に一度ふっと息を吹きかけると、美穂の眼前の亀頭がひくつき、透明の液に混じって白い液体がどろどろとこぼれてきた。

「うっううー」

じんじんとした、快樂のないおもらし。

理不尽な射精に大輔はうなだれた。

焦らしに焦らされ、たまった精液はなかなか止まってくれないが、気持ちよさはいつさいない、泣きたくなるような焦燥感とせつなさに大輔の腰がずるずると床におちた。

膝をついた、大輔の股間からぼたりぼたりと最後の精液が流れ、溜まりをつくった。

すべての希望がそがれ、目の焦点があっていない大輔を見下ろした美穂はゆっくりと腰を下ろし、軽く頬に口づけをした。

視線を上げ顔を見た大輔に、美穂はばつの悪そうな笑顔をみせた。

思考が定まらず言葉のでない大輔の股の間に白い右手が伸ばされた。

「あっううー」

労わるようにゆっくりと陰囊を揉みこみながら美穂が囁いた。

「こっちに来て、次はちゃんと気持ちよくするから」

やさしく、誘導するように、玉を持ち上げると大輔はゆっくり立ち上がった。

そのまま、袋を甘揉みしながら、美穂は大輔をつれてバスルームから退室した。

## 巧みな彼女の性事情～体験版～

未編集版

ここまでが体験版となります。

製品版本編は約140ページになります。

興味があるかたは、是非ご購入おねがいします。

式 フロン